みなの歴史散歩 No.28

皆野町出土の大刀（稲荷塚古墳出土 単鳳環頭大刀（国神））

社会教育担当　望月 暁

剣・直刀（大刀）・刀子

前回の歴史散歩では柳瀬古墳群から出土した馬具と胡ろくについて見ましたが、町内の古墳からはこの他にもさまざまな遺物が発見されています。鉄剣、直刀、刀子などは代表的なものです。

剣は刃が両方に付きます。埼玉古墳群の稲荷山古墳から出土した鉄剣（行田市：国宝「武蔵埼玉稲荷山古墳出土品」）は有名です。

直刀は、片方のみに刃が付いたもので、「直」とあるとおり形はまっすぐです。大刀とも書きます。大刀は平安時代以降、馬上戦を意識して長大で反りの入った太刀（読み方は大刀と同じです）となり、その後打刀へと変化していきます。

刀子は小型の刀で、古墳から出土するものは日常品と思われます。

今回は、国神の大イチョウ（県指定天然記念物）も含め、現在ほとんどが消滅している上の平古墳群の1つ、稲荷塚古墳出土の大刀について見ていきましょう。

稲荷塚古墳出土の単鳳環頭大刀

同大刀は大正5年の発掘調査で出土し、翌年に現在の東京国立博物館に引き取られました。平成31年、修理が完了して報告書が出されています。

写真を見てください。刀身と柄頭、鐔が写っています。刀身は残存長61㎝でうち刃部は51㎝。はばきに日輪や渦の文様が施されています。鐔は刀身とペアで長軸5・4㎝、短軸4・4㎝。アルファベットの「C」字状の文様が施されています。

今回の主役は柄頭で、「単鳳環頭」はこの部分の特徴を示したものです。柄頭は茎と環（丸い輪の部分）に分かれ、茎は5・1㎝、環は長軸5・5㎝、短軸4・5㎝あります。環の中には左を向いた鳳凰が配されます。環にも文様が残りますが、これは口を開けた龍を模したものであることが分かっています。

報告書によれば、この単鳳環頭大刀は全国的にも類例がほとんどありません。同書では、朝鮮半島の技術者が製作に直接関与した可能性があるとした上で、同大刀を6世紀中頃以降の舶載品としています。

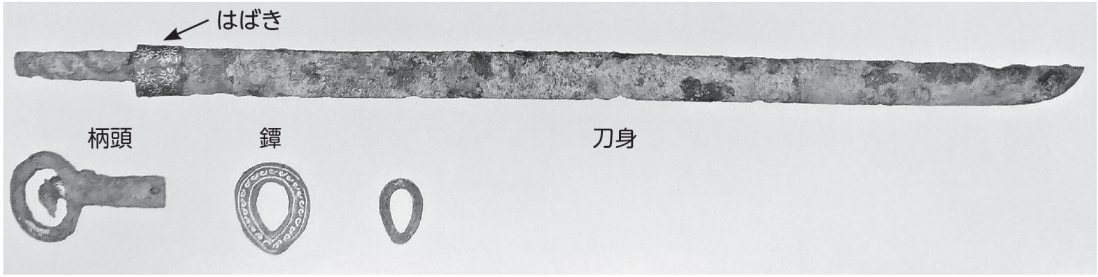
単鳳環頭大刀の意味

大刀が古墳から出土するのは古墳時代前期以降です。関東では上毛野（群馬県）に多く、同後期後半（6世紀後半）以降、大小の古墳で装飾が施された大刀が数多く見つかっています。これらは武器ではなく、被葬者の生前の社会的立場を示すものと考えられます。

例えば、中央の有力氏族が古墳被葬者に大刀を下賜したケースがあります。一般的に古墳被葬者は地元の経営者であり、水利、交通、輸送などに関わる社会インフラ整備にも携わっていました。これらの事業を円滑に進めるためには、人やモノへの投資や中央からの最新技術の導入が不可欠です。一方、中央の有力氏族としても、地方に設置した屯倉の管理や大王に仕える人員の確保が必要です。大刀は、このようなお互いのニーズを満たすために結んだ契約や人間関係の証だったと思われます。

今回の単鳳環頭大刀は、町内のみならず北関東一帯を含め、秩父盆地の入り口にあたる上の平古墳群の位置づけを考えるための有力な資料となりそうです。

柄頭部



国神稲荷塚古墳出土　単鳳環頭大刀
東京国立博物館「埼玉県皆野町稲荷塚古墳出土品の研究」『MUSEUM　No.693』、2021